Japanese Association of Educational Psychology

197 Japanese Journal of Educational Psychology, 1987, 35, 197—203

受け入れ学級のクラス替えが転校児童の交友関係に与える影響**

小 泉 令 三*

THE EFFECTS OF CLASS REARRANGEMENT OF HOST CLASSES ON PEER RELATIONSHIP OF TRANSFERRED CHILDREN

Reizo KOIZUMI

The present study aimed at examining the effects of class rearrangement of host classes on peer relationship of transferred children, and the validity of the use of the psychological distance map (PDM) for assessing the interpersonal psychological distances among elementary school children. Subjects were 40 third- to sixth-grade children and their classmates. Assessments were made four times over a three-month period after transference in April by the PDM. Psychological distances on the PDM in the two sampled classes significantly correlated each with choice in the sociometric test, frequencies in interaction observed during free play time, and the order on the rating scales for intimacy. Transferred children in fifth-and sixth-grade non-rearranged classes had lower status indexes assessed by PDM than host members in April. No such differences were found in rearranged fifth- and sixth-grade classes and in all third-and fourth-grade classes. Effects of class rearrangement on peer relationship of transferred children were discussed from a developmental point of view.

Key words: transferred children, peer relationship, class rearrangement, psychological distance map, environmental transition.

問　　題

保護者の転勤や転宅などに伴う児童・生徒の転校は従来より見られる現象であるが，教育上重要な問題であるにもかかわらず，転校生の適応過程に関する実証的な研究は少ない。

転校により，児童はそれまで慣れ親しんだ旧環境を離れ，新環境へ移行 (transition) することになる。Wapner, Kaplan & Cohen (1973) の人間—環境相互交流論は，こうした環境移行事態における人間の適応過程を，人間と環境との相互交流 (transaction) によって説明を試みている。この理論では，人間は，環境からの働きかけに対して受動的に順応・同化するだけでなく，自らも積極的に環境に働きかけ，環境との間により調和のとれた状態を築きあげようとする存在であることが強調されている。そして Wapner et al. (1973) は，こうした環境は，物理的環境，対人的環境，社会文化的環境の３次元から成り立つことを提唱している。

小泉 (1986) は環境を構成するこれら３次元に関して，小学校転校生の転校後３か月間にわたる適応過程の検討を行った。その結果，転校後２—３か月間は，転校生は

* 広島大学大学院教育学研究科 (Department of Psychology, Faculty of Education, Hirosima University)
現所属　福岡教育大学 (Fukuoka University of Education)

** 本研究は，兵庫教育大学大学院へ提出された昭和59年度修士論文の一部を，加筆修正したものである。御指導いただいた兵庫教育大学　内藤勇次教授，浅川潔司助手，助言をいただいた富山大学古川雅文助手に深く感謝する。また，本研究に御協力下さった先生方，および本論文を御校閲いただいた広島大学教育学部　山本多喜司教授，今泉信人助教授に御礼申し上げる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

受け入れ児童に比べ，教師・級友との個人的な対人交流が不活発であること，また学校敷地内の設備・遊具の認知数が少ないことを報告している。本研究では，対人的環境の内，特に転校生の学校生活において重要な意味を持つ一側面と考えられる級友との交友関係を検討する。

転校生の交友関係に関して，Ziller & Behringer(1961)は，ソシオメトリック・テストを用いた研究で，転校生に関して低学年（1年—3年）は高学年（4年—6年）より，また女子は男子より適応が容易であることを報告している。横島（1976）は，ソシオメトリック・テストを使用し，以前に転校を経験した転校生の方が適応に有利であることを報告している。

以上の研究では，転校生の交友関係に影響する要因として，転校生の性や学年，転校経験の有無など転校生の持つ特性のみが考慮されてきた。しかし，転校生の適応過程を環境との相互交流の所産であると考えるならば，環境自体の持つ特性にも注目する必要があるであろう。

ところで，我国では4月に新年度が開始されるため，この時期に転勤に代表されるように人口移動も激しく，したがって転校生も1年の他の時期に比べ多数に上るであろうと推察される。この時期には，受け入れ学級は，進級にあたってクラス替えを行う場合と行わない場合とがある。クラス替えのない場合，前年度の友人関係がクラス内でそのまま維持されている可能性が高いのに対し，クラス替えがあると，4月当初の学級内の友人関係はより流動的であろう。こうした受け入れ学級の集団構造の相違は，転校生の交友関係にも少なからず影響を与えると考えられる。

そこで本研究では，環境の持つ特性として，新年度当初の受け入れ学級のクラス替えの有無を取り上げ，これが小学校転校生の交友関係に与える影響を検討することを第1の目的とした。調査期間は，転校後短期間における転校生の交友関係の変化を検討する目的から，4月の転校直後から夏期休業前までの3か月間とした。ここで，クラス替えのない学級では人間関係がより固定的であり，そこへの転校生は，クラス替えのあった学級への転校生に比べ，受け入れ児童との間に測度の差の認められる期間が，より長期にわたるであろう（仮説1）と考えられた。

なお，転校生の特性としては，年齢水準と転入年次を取り上げることとした。転校生の年齢水準に関して，Ziller & Behringer（1961）は，低学年転校生が高学年転校生より環境適応が容易であったのは，調査対象の学校が，入学から卒業までクラス替えをしないという制度であったことが原因かもしれないと述べている。我国では，小学校卒業までに何度かクラス替えを経験するのが普通であり，この条件下で年齢水準による転校生の適応過程の違いを検討することとした。一般に，高学年ほど交友関係は内面的要因に支えられ，非流動的であると考えられるので，年齢水準の高い転校生は年齢水準の低い転校生より転校によって受ける影響は大きいであろう（仮説2）と予想された。転入年次に関しては，小泉（1986）が，そこで取り上げた教師・級友との個人的な対人交流，学校敷地内の物理的環境認知，学業への関心，対クラス感情のいずれの測度に関しても，転校後約1年の学校生活を経験した前年度転校生と，それ以前からの在籍児童との間に有意な差は見出せなかったと報告している。本研究で取り上げる交友関係に関する測度についても，前年度転校生と，それ以前からの在籍児童との間に差は認められないであろう（仮説3）と考え，これを検討することとした。

ここで，方法論上の問題として，これまで交友関係の調査にはソシオメトリック・テストが使用されることが多かった。しかし，この方法は教育的配慮から実施が困難になりつつある。そこで，本研究ではWapner（1978）が開発した心理的距離地図（Psychological Distance Map：以下PDMとする）を採用することとした。PDMは，紙面上に，被験者の心に浮かぶ人々を，被験者と各対象人物の心理的近さ，親しさ，重要性といった心理的距離を考慮しつつ記入することを求めるものである。古川・藤原・井上・石井（1983）は，PDMからはPDM上の距離，人数，対象人物の記入位置や対象人物間の人間関係など豊富な情報を得られること，そしてこれらの情報は，被験者の自由な反応によって被験者の持つ社会的関係に関するイメージが直接投影されたものであると述べている。なお古川ら（1983）は大学新入学生の対人関係認知過程をPDMを用いて検討したが，小学生を対象とし，学級場面に使用するのは本研究が初の試みである。またPDMの妥当性に関しては，古川ら（1983）が質問紙尺度との相関によって検討しているが，本研究での対象が小学生であることを考慮するならば，質問紙尺度にのみ頼ることなく，より多面的な妥当性検討が要求されるであろう。

そこで本研究では，PDMより得られた学級内成員間の心理的距離を，従来のソシオメトリック・テスト，自由遊び時間における行動面での相互作用頻度，内面的に感じる親近度と比較することにより，PDMの妥当性を多面的に検討することを第2の目的とした。

方　法

調査対象者および分析対象者

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 1 調査対象者と分析対象者

学年	調査対象者	クラス替え	分析対象者		
			新転入群	前年転入群	ホスト群
3	128	あり	11(2, 9)	15(9, 6)	32(16,16)
		なし	0(0, 0)	0(0, 0)	0(0, 0)
4	119	あり	2(0, 2)	6(2, 4)	8(4, 4)
		なし	6(2, 4)	7(2, 5)	24(12,12)
5	139	あり	12(8, 4)	19(10, 9)	32(16,16)
		なし	0(0, 0)	0(0, 0)	0(0, 0)
6	97	あり	0(0, 0)	0(0, 0)	0(0, 0)
		なし	9(6, 3)	18(9, 9)	24(12,12)

( ) 内は前が男子，後が女子の人数を表わす

兵庫県下のH小学校の3年—6年の全クラス，および大阪府下のS小学校の3年—6年の各学年1クラスずつが本研究に参加した。調査対象者およびその内の分析対象者の内訳を，昭和59年4月のクラス替えの有無別に表わしたものがTABLE 1である。新転入群とは昭和59年4月の転校生，前年転入群とは昭和58年度の転校生を表わし，またホスト群とは新転入群，前年転入群以外の児童から各クラスごとに男子4名，女子4名を無作為抽出したものである。なお，分析の都合上，3年と4年を中学年，5年と6年を高学年とし，この年齢水準の区分を学年と呼ぶことにする。

調査時期

新転入群の転校後1週間目にあたる昭和59年4月上旬に第1回目，転校後1か月目の5月上旬に第2回目，転校後2か月目の6月上旬に第3回目，転校後3か月目の7月上旬に第4回目の調査を実施した。

調査内容

以下の3種類の尺度および，学校への適応と学校敷地内の物理的環境認知を測定する質問紙から構成されていた。本研究で分析対象としたのは，以下の3種類の尺度であった。

1. 心理的距離地図（PDM）125㎜四方の正方形の枠の中央に自己（わたし・ぼく）を表わす顔の絵を記したもので，各被験者に枠内にクラスで親しい友人を最大7人まで，自分との心理的距離を考慮して○で表わし，記名するよう求めた。具体的教示は次のようなものであった。「あなたの親しい人（見近な人）を○でかいてください。親しい人ほど「わたし・ぼく」の近くになるようにかいてください」

2. 親近度尺度 PDMに記入した各友人についてそれぞれa．親しさの強度（1項目；どれくらい親しいか），b．援助・被援助関係（2項目；困っているとき助けてあげたいか，助けて欲しいか），c．自己開示性（2項目；自分のことや秘密の話を話すか，話してくれるか），d．友人関係についての今後の期待と予見（2項目；これからも親しくしていたいか，親しくしていけるか）の計7項目に4段階（4点：親近度が高い，1点：親近度が低い）で評定を求めた。

3. ソシオメトリック・テスト PDMに記入した各友人について，PDM，親近度尺度とは別に，親しさの順序づけを求めた。

調査手続

小冊子にまとめた質問紙を各児童に配布し，クラス単位で調査者が説明しながら各項目への回答を求めた。

行動観察

質問紙調査の調査対象者に含まれているH小学校の4年生1クラス（男子17名，女子12名），5年生1クラス（男子20名，女子14名）の全員が被観察者であった。1回の観察時期は質問紙調査を含めて約1週間の期間であり，昭和59年4月と6月にそれぞれ1週間ずつ計2回の調査時期を設定した。自由遊び時間における行動の内，特にどのクラス成員と相互作用を行ったかということを1回3分間の時間見本法によって，各児童について各観察時期ごとに4回ずつ観察した。なお，4年生，5年生合わせて数名の児童については，本人の都合により，2—3回しか観察できない観察時期があった。観察者はクラス成員の氏名を予め記憶した訓練された大学院生で，2—3人の観察者が1クラスを担当し，観察内容はテープレコーダーにより記録した。被観察者の観察順序はランダムであった。記録内容を筆記記述した後，3分間の観察時間内で被観察者と1回以上相互作用をもったクラス成員に1点を与えた。こうして各調査時期ごとに被観察者と相互作用をもったクラス成員ごとの得点を算出した（最高4点，最低0点）。この得点を基に，被観察者と一番多く相互作用をもったクラス成員に一位を与えた。以下同様に順序づけを行い，各クラス・観察時期ごとに相互作用の順序づけ行列を作成した。

結　果

PDM の妥当性

行動観察の観察者間一致率を算出するため，各クラス・各観察時期ごとに，数名の特定児童について1名ずつ2—3名の観察者が同時に観察した。被観察者ごとに，3分間の観察時間内で，被観察者が相互作用をもったと記録されたクラス成員の内，観察者間で一致した児童数を，一致数と不一致数の合計で除して算出したところ，一致率の平均は86.4%であった。

行動観察の対象となったクラスに関して，PDMに表わされた複数の友人について，PDM中央の自己を表わ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

す顔の絵に1番近く記入された者を1位とし，順次順序付けを行った。PDM に現われなかったクラス成員は等しく8位とした。このようにして，クラス単位で各調査時期ごとに児童間の PDM 順序づけ行列を作成し，Kruscal の多次元尺度構成法（MDSCAL）により stress 値5％以下の解を求め，相対的な刺激布置とともに，これをもとに任意の2者間の刺激間距離を算出した。

ソシオメトリック・テストによる順序付け行列，行動観察より得られた行動面での各クラス成員との相互作用の順序付け行列，及び親近度尺度項目の合計得点による親近度の順序付け行列についても，PDM と同様に M-DSCAL により任意の2者間の刺激間距離を算出した。PDM，ソシオメトリック・テスト，行動観察，親近度尺度よりそれぞれ得られた刺激間距離の相互の間のピアソン積率相関値を算出し，整理したものが TABLE 2 である。PDM より得られた刺激間距離は，他のいずれの測度から得られた刺激間距離とも有意な相関関係を示していた。なお，PDM—行動観察間の相関値が，PDM—ソシオメトリック・テスト間および PDM—親近度尺度間の相関値より低いが，行動観察はソシオメトリック・テストや親近度尺度との間においても同程度の相関値であり，PDM の妥当性の低さを意味するものではないといえよう。

TABLE 2　PDM，ソシオメトリック・テスト，親近度尺度，行動観察から得られた刺激間距離の相互の間のピアソン積率相関係数

学年	測度	調査時期					
		4月			6月		
		PDM	S	I	PDM	S	I
4	ソシオメトリック・テスト(S)	.93**			.95**		
	親近度尺度(I)	.93**	.98**		.98**	.96**	
	行動観察(B)	.49**	.55**	.56**	.60**	.58**	.59**
5	ソシオメトリック・テスト(S)	.98**			.98**		
	親近度尺度(I)	.98**	.98**		.98**	.98**	
	行動観察(B)	.59**	.61**	.60**	.43**	.42**	.42**

距離対　4年：$N=406$　5年：$N=561$　** $p<.01$

社会測定的地位指数（以下 Isss と略する）

PDM に表わされた友人を，選択・被選択関係ととらえ，クラス集団内における個人の地位を，次の式で算出される Isss（田中，1983）によって算出した。

$$Isss=\frac{1}{2}\left(\frac{CRS}{N-1}+\frac{mc-mr}{d}\right)$$

CRS　：被選択数—被排斥数

mc　：相互選択数

mr　：相互排斥数

d　：選択排斥制限数

N　：集団人数

Isss はクラス内での相互選択・相互排斥も考慮した選択排斥の比率を表わすものであり，本研究では選択関係のみを用いた。したがってこの場合，Isss の最大値は1，最小値は0となる。Isss に関して，2（中・高学年）×3（転入年次）×2（クラス替え有・無）×4（調査時期）の4要因分散分析を実施した。調査時期の要因は被験者内要因であった。

その結果，調査時期の主効果（$F(3,639)=3.37$, $p<.05$）が有意であり，調査2回目の指数は，1回目・4回目に比べ高かった*。転入年次×調査時期の一次の交互作用（$F(6,639)=3.85$, $p<.01$）が有意であり，調査1回目に新転入群は，前年転入群，ホスト群に比べ低指数であり，また新転入群の調査時期による変動は，調査1回目が他の時期よりも低かった。他にクラス替え×調査時期の一次の交互作用（$F(3,639)=2.91$, $p<.05$）も有意であり，調査1回目に，クラス替えをした群はしない群よりも低指数であって，またクラス替えをした群の調査時期による変動は，1回目が2回目・3回目より低指数であった。さらに，学年×転入年次×クラス替え×調査時期の三次

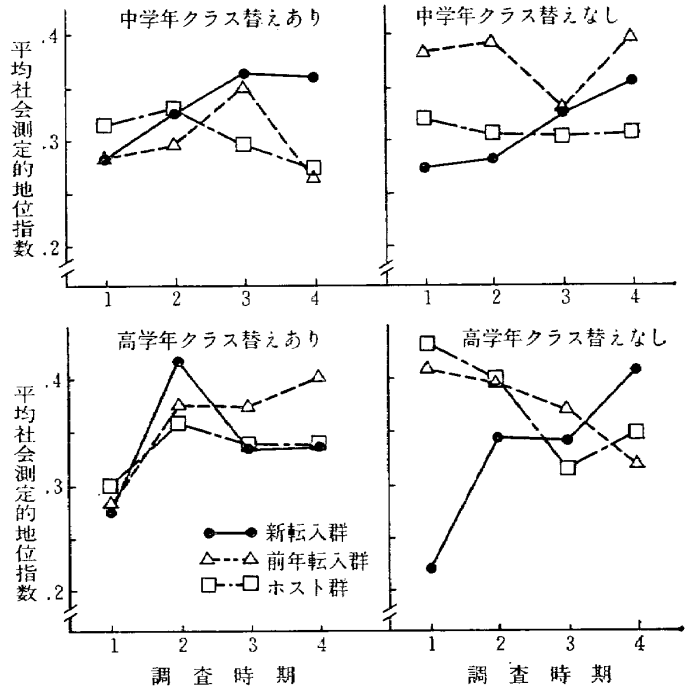

FIG. 1　学年・転入群・クラス替えの有無・調査時期ごとの平均社会測定的地位指数（Isss）

* 多重比較は以後の分析を含めすべて危険率を.05に設定し，Turky の HSD 法（Kirk, 1968）に基づいて行った。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

の交互作用（$F(6,639)=2.52$, $p<.05$）が有意であった。この交互作用を表わしたものがFIG. 1である。クラス替えをした場合には，中学年も高学年も各調査時期で転入年次群間に指数の差は認められなかったのに対し，クラス替えのない場合には，特に高学年で特徴的な変動が見られた。すなわち，高学年でクラス替えのない場合，調査1回目に新転入群は他の2群よりも低く，また新転入群の1回目の指数は，新転入群の2―4回目の指数よりも低かった。調査2回目以降には，新転入群と他の2群の間に差は認められなかった。また高学年でクラス替えのない場合の調査1回目の前年転入群，ホスト群は，高学年でクラス替えのあった場合の調査1回目の前年転入群，ホスト群よりもそれぞれ高指数であった。学年の主効果（$F(1,213)=2.82$, $p<.10$）に傾向が認められ，高学年は中学年よりもIsssが高い傾向にあった。

友人選択定着率

新転入群，前年転入群，ホスト群の児童がクラス内で友人としてPDMに記入した児童の，調査時期による定着率を検討するために，調査4回目の選択を基準として，以下の式で定義される友人選択定着率（Fx）を算出した。Fxの最大値は1，最小値は0である。

$$Fx=\frac{\text{ある調査時期と4回目に共通する被選択者の数}}{\text{ある調査時期と4回目の選択数のうち，多い方の数（最大7人）}}$$

各条件群におけるFxの平均値とSDを整理したものがTABLE 3である。これに関して，2（中・高学年）×3（転入年次）×2（クラス替え有・無）×4（調査時期）の4要因分散分析を実施した。調査時期の要因は被験者内要因であった。

TABLE 3 学年・転入群・クラス替えの有無・調査時期ごとの調査4回目を基準とした友人選択定着率の平均値と標準偏差

学年	転入群	クラス替え	調査時期 1	2	3
3,4	新転入群	あり	.217(.146)	.468(.155)	.603(.158)
		なし	.426(.246)	.367(.169)	.614(.164)
	前年転入群	あり	.461(.239)	.570(.160)	.625(.177)
		なし	.565(.081)	.592(.269)	.664(.093)
	ホスト群	あり	.382(.193)	.496(.204)	.565(.214)
		なし	.534(.198)	.628(.177)	.684(.166)
5,6	新転入群	あり	.312(.217)	.486(.226)	.689(.236)
		なし	.420(.213)	.540(.228)	.684(.192)
	前年転入群	あり	.444(.209)	.566(.163)	.675(.154)
		なし	.561(.190)	.629(.157)	.674(.184)
	ホスト群	あり	.522(.179)	.582(.170)	.685(.155)
		なし	.612(.162)	.684(.148)	.656(.172)

その結果，すべての主効果が有意であった。学年の主効果（$F(1,213)=4.97$, $p<.05$）については，高学年は中学年よりも定着率が高かった。転入年次の主効果（$F(2,213)=7.76$, $p<.01$）については，新転入群は前年転入群，ホスト群よりも定着率が低く，またクラス替えの主効果（$F(1,213)=7.56$, $p<.01$）については，クラス替えのあった方が定着率は低かった。調査時期の主効果（$F(2,426)=84.95$, $p<.01$）については，隣接したいずれの調査時期間でも定着率は上昇していた。交互作用については，転入年次×調査時期（$F(4,426)=6.90$, $p<.01$）の一次の交互作用が有意であった。新転入群は調査1回目，2回目ともに他の2群より定着率が低く，3回目で他の2群と同水準に達していた。クラス替え×調査時期の一次の交互作用（$F(2,426)=7.03$, $p<.01$）が有意であり，調査1回目に，クラス替えのあった群はなかった群よりも定着率が低かったが，2回目以降は両群間に差は認められなかった。なお，学年×クラス替え×調査時期の二次の交互作用（$F(2,426)=2.43$, $p<.10$）に傾向が認められた。クラス替えの有無群間に差の認められる傾向が，中学年では調査1回目のみであったのに対し，高学年ではこれが調査2回目まで長びく傾向があった。

被選択心理的距離得点

被験者がPDM上に描いた友人を表わす○印の中心と，自己を表わすPDM中央の顔の絵の中心との物理的距離をmm単位で測定し，その逆数を100倍したものを心理的距離とした。友人として選択される際，どの程度の心理的距離で選択されているのかを検討するために，新転入群，前年転入群，ホスト群の児童が級友から親しい友人として選択されたときの心理的距離を算出した。すなわち，各児童について複数の友人から選択されたときの心理的距離の平均値を，その児童の被選択心理的距離得点とした。なお，だれからも選択されていない場合には，被選択心理的距離得点は0とした。被選択心理的距離得点について，2（中・高学年）×3（転入年次）×2（クラス替え有・無）×4（調査時期）の4要因分散分析を実施した。調査時期の要因は被験者内要因であった。

その結果，転入年次の関連した主効果，交互作用はいずれも有意ではなかった。学年の主効果（$F(1,213)=4.55$, $p<.05$）が有意であり，高学年（$\bar{X}=6.20$）は中学年（$\bar{X}=5.78$）より高得点であった。また学年×クラス替え×調査時期の2次の交互作用（$F(3,639)=4.22$, $p<.01$）が有意であった。中学年でクラス替えのあった場合，被選択心理的距離得点は調査2回目（$\bar{X}=5.36$）が1回目（$\bar{X}=6.37$）より有意に低下していた。中学年でクラス替えのない場合と高学年では，調査時期による得点の有意

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

な変動は認められなかった。

考　　察

PDM の有用性

PDM から得られたデータをもとに MDSCAL によって算出したクラス成員間の刺激間距離は，従来より使用されてきたソシオメトリック・テストや遊び時間の相互作用頻度，及び親近度尺度による親近度から，それぞれ同様の手続で算出された刺激間距離と，いずれも有意な相関を示した。しかもこれは，中高学年といった年齢水準や，調査時期の違いによる影響を受けなかった。したがって，PDM は，学級内の友人関係の調査には適切でかつ安定した測定法であるといえよう。しかも，ソシオメトリック・テストに比べ，友人の順序付けに関する被験者の心理的抵抗が少なく，また調査者は視覚的に情報が得られるなどの利点をもつことから，今後の活用が期待できる。さらに，PDM に記入された友人の位置・配置関係などのより質的な情報の検討や，また友人以外の人物への記入対象の拡大により，PDM の有用性はより高まると予想される。

転校生の交友関係

進級に伴う受け入れ学級のクラス替えの有無が，転校生の交友関係に及ぼす影響は，Isss に関して顕著であり，特に学年によってその様相が異なることが明らかとなった。

すなわち，高学年でクラス替えのなかった学級では，調査1回目の転校生の Isss は受け入れ児童（前年転入群，ホスト群）よりも低く，この時期には転校生は学級内で相対的に低地位であった。これは，クラス替えがなかった学級では学級内の前年度からの友人関係網が維持されており，この友人関係網内に地位を獲得している受け入れ児童と，地位をもたない転校生との差が反映されたものであろう。こうした情況で，転校生は級友との接触を通して，既存の友人関係網内にしかるべき地位を獲得していくものと考えられる。

一方，高学年でクラス替えのあった学級では，受け入れ児童は調査1回目にクラス替えのなかった学級の受け入れ児童よりも Isss が低く，またいずれの調査時期においても，受け入れ児童と転校生の間に Isss の差は認められなかった。これはクラス替えのあった学級では，受け入れ児童も転校生と同様に新しい学級内友人関係網の構築を迫られる状況に直面していることを示唆するものであろう。

しかし中学年に関しては，結果は異なっていた。転校生，受け入れ児童ともにクラス替えのあった場合となかった場合で Isss に差がなく，また受け入れ学級のクラス替えの有無にかかわらず，いずれの調査時期にも受け入れ児童と転校生の間に Isss の差は認められなかった。

以上のことから，Isss に関しては，クラス替えのない学級への転校生はクラス替えのあった学級への転校生に比べ，受け入れ児童との間に測度の差の認められる期間がより長期にわたるであろうとの仮説1は高学年に関して支持された。また，年齢水準の高い転校生は年齢水準の低い転校生より，転校によって受ける影響は大きいであろうとの仮説2も支持されたと言えよう。

仮説2に関して，年齢水準によってクラス替えの影響が異なるのは，友人関係の質の相違によると考えられる。上田（1963）は，より低年齢ほど近接性や功利性といった事由で友人を選択するが，高学年ほど性格的類似性など内面的特徴を理由として選択することを報告している。すなわち，高学年児童は他者の内面的性格を知り，それと自己とを関連づける作業によって友人関係を形成・深化しているために，クラス替えによる影響が大きいと考えられる。こうした年齢水準によるクラス替えの影響の違いは友人選択定着率に表われている。すなわち，転入年次群をすべて込みにした場合，高学年のクラス替えのあった学級における児童の友人選択定着率が，クラス替えのなかった学級の児童よりも低くなる期間が新年度開始後2か月に及ぶ傾向があったが，中学年に関してはこの傾向はより短期間であった。また他の3要因をすべて込みにした学年ごとの平均友人選択定着率は，中学年が高学年よりも低かった。つまり，高学年児童は中学年児童に比べ，全般的に友人選択の変動は少ないが，クラス替えによる新しい友人関係の形成を迫られる際には，クラス替えの影響は中学年に比べ長期間にわたる傾向があるといえる。

本研究で得られた知見を総合すると，被選択心理的距離得点に関して，転入年次の要因を含む主効果や交互作用は見出されなかったことから，一旦友人として選択されたならば，それが転校生であるかどうかにかかわりなく，ほぼ同程度の心理的距離で選択されることが示唆されよう。しかし，転校生が友人として選択されるかどうか，またそうした選択関係に基づく相互選択の成立に関しては，Isss の結果が示すように，高学年において受け入れ学級のクラス替えの有無の影響が認められた。ただ，中学年においては，クラス替えの有無の影響は認められず，年齢水準による友人関係の質の相違がこれに関与している可能性が考えられた。転校生の受け入れにあたっては，受け入れ学級の特性，すなわち学年やクラス替えの有無に留意した指導が必要であるといえよう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

なお，転校後約1年を経過した前年転入群はいずれの測度，調査時期においても，それ以前より在籍するホスト群との間に差は認められず，転校後の新環境での約1年の学校生活が，転校生の新環境適応に十分な期間であることが確認されたといえよう。前年度転校生と，それ以前からの在籍児童との間に，測度の差は認められないであろうとの仮説3は支持された。

今後の課題

本研究では，受け入れ学級の特性としてのクラス替えの有無が転校生の適応過程に与える影響，すなわち移行する者が環境によって受ける影響を検討した。ところで，人間—環境相互交流論においては，人間と環境の相互交流によってよりよき均衡状態が達成されることが主張されており，これは環境の側も人間，すなわち移行する者によって，程度の如何にかかわらず影響を受けることを意味していると考えられる。今後は，環境である受け入れ学級が転校生によってどのような影響を受け，さらに転校生に対してどのような適応過程を示すのかといった問題も，転校生の適応過程と併せて検討される必要があるであろう。

引用文献

Kirk, R.E. 1968 *Experimental design : Procedures for the behavioral sciences.* Belmont. California : Books/Cole.

小泉令三 1986 転校児童の新しい学校への適応過程 教育心理学研究，**34**，289-296.

古川雅文・藤原武弘・井上 弥・石井眞治・福田 廣 1983 環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達的研究 心理学研究，**53**，330-336.

田中熊次郎 1983 増訂 ソシオメトリーの理論と方法 明治図書

上田敏見 1969 学級における社会的受容に関する発達心理学的研究（IV）—対人結合要因に関する発達的分析— 奈良学芸大学紀要，**17**(1)，227-242.

Wapner, S. 1978 Some critical person-environment transitions. *Hirosima Forum for Psychology*, **5**, 3-20.

Wapner, S., Kaplan, B. & Cohen, S.B. 1973 An organismic-developmental perspective for understanding transactions of men in environment. *Environment and Behavior*, **5**, 255-289.

横島 章 1976 転校生の適応過程に関する研究(1) 日本教育心理学会第18回総会発表論文集，450-451.

Ziller, R.C. & Behringer, R.D. 1961 A longitudinal study of the assimilation of the new child into the group. *Human Relations*, **14**, 121-133.

（1986年10月13日受稿）

NII-Electronic Library Service